様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２７５９

研究課題名（和文）こどもの協同的な造形活動に対する混合的アプローチによる質的分析

研究課題名（英文）A Qualitative Analysis of Children's Collaborative Art Activities using a Mixed methods Approach

研究代表者
武田　信吾（Takeda, Shingo）

関西学院大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０６００９２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，幼児～児童期のこどもがペアで行う描画活動のプロセスについて，3つの異なる研究手法を混合的に用いて微視的に分析した。結果，こどもたちは互いに相手の描画状況に関心を向け合い，紙面や描画材の用い方や描き方，制作物へ付与される意味について相互に影響を与え合っていることが明らかになった。また，その関係性に主従はなく，描画活動への志向内容がこども間で協応し，調整され，共有化されている点において，協同性の萌芽が見出された。なお，混合的アプローチとしてトライアンギュレーションを行ったことにより，具体的にエビデンスを示しながら，造形活動における出来事の時系列的な関係性について言及することを可能とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は，一見すると平行的に行われているものと見受けられるこどもたちの造形活動について，実際には互いに相手の存在が自らの表現を形作っていることを具体的に示すものであり，造形活動におけるこども同士の学び合いや関わり合いについて理解する視座を拡充するものとなったと考える。また，トライアンギュレーションを用いた点については，同一対象を異なる視点で捉えることにより複眼性がもたらされるとともに，対話を通じて研究者の認識そのものが更新されることへとつながっており，美術教育学分野における質的分析の新たな試みとして，研究者個人では解決できない認識論的な限界を打開する可能性を提起するものとなったと考える。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study is to examine how a ‘creative situation’ is formed through collaboration and the use of dialogue by engaging in an art activity. Triangulation was employed to conduct qualitative analyses to incorporate methodologies with different theoretical standpoints, each of which focused on gaze behaviours, interactions, and creative processes. Regarding some cases in which a pair of children performed a drawing activity sharing a place and tools, we analysed the relevance of involvement with the partner and the expression contents. The results were as follows, we clarified the presence and progress of interactive collaboration, in which the presence of others shaped their own expressions. And it was found that in a chain of actions between pairs, the way of handling the paper and tools, the way of drawing and painting, and their meanings influenced each other in such a way that the intention of that activity was coordinated.

研究分野：美術教育学

キーワード：協同的な造形活動　混合的アプローチ　質的研究　幼児　児童　視線行動分析　相互行為分析　制作過程分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

これからの学校教育では，能動的で自律的な存在が互いに関わり合う協同的な学習プロセスが一層重視されことになる。美術教育分野では，協同的な造形活動において，双方向性の関わり合いのなかでイメージがいかに共有化され，創造的な行為へと移るのか，こどもの具体的な姿から相互作用の質について迫る必要性がある。しかし，局在的でインビジブルな性格を有した自然発生的な相互作用に対しては，実際の学習状況のなかで的確に把握する際はアプローチの方法を工夫する必要があり，こどもの協同的な造形活動については，まだ研究レベルで検討が進んでいないのが現状である。上記の研究課題への取組は，教育・保育現場で協同性を働かせる学習場面を構築する上で有益な情報となることが期待される。

２．研究の目的

本研究は,幼児,児童が協同的に行う造形活動について,こども間の自然発生的な相互作用と,作品の制作過程との関係性を質的に明らかにする（幼児は，協同性を発揮して活動するようになる幼児期後期を主な対象とする）。研究メンバーの武田信吾，松本健義，栗山誠は，それぞれが独自に開発した分析手法によって，こどもの造形活動について研究を進めてきた。本研究では，3 人の分析手法を組み合わせることにより，こども間の相互作用の質的分析における混合的なアプローチの確立を目指す。なお，本研究では，心や力をあわせることや，互いの思いや考えを共有することを「協同」と捉えている。

３．研究の方法

本研究では，研究メンバーの武田信吾が，視線分析装置「Tobii Pro グラス 2（Tobii 社）」と行動コーディングシステム「BECO2（DKH 社）」を併用した時系列的な整理によって，他者からの情報取得と活用状況の解明する「視線行動分析」を行う。松本健義が，定点ビデオカメラ等によるトランスクリプトの詳細な書き起こしに基づいて，こども間の社会的関係性を状況論的に解明する「相互行為分析」を行う。栗山誠が，描画プロセス分析シートを用いながら，作品への意味付与と表現持続性の関係を解明する「制作過程分析」を行う。これら 3 つの分析手法に基づいて，それぞれが同一の活動データについて分析を行い，その結果の関係性について 3 者が一体的に検討していく。なお，本研究は，研究メンバーの全ての所属先において研究倫理審査を受け，承認された上で行った。

４．研究成果

（1）幼児ペアによる造形活動の事例分析

①事例概要

分析対象として扱った事例は，2019 年 10 月に行われた，幼児ペア 1 組の造形活動である。ペアは 5 歳 11 ヵ月の男児（以下，幼児 M）と 6 歳 0 ヶ月の女児（以下，幼児 F）の組合せであり，同じ幼稚園，クラスに通っている。

活動場所は，鳥取大学地域学部附属子どもの発達・学習研究センター防音室（床面積 4.7m×4.7m）を用いた。当該施設は複数の定点カメラが設置されており，室内の様子を別室からモニタリングすることが可能である。部屋の中央に，大きさ 75cm×120cm の机を置いて模造紙を敷き，その上に 4 ッ切 2 枚をつないだ白画用紙と角型パス（16 色セット）1 箱を設置した。また，幼児 2 人が机を介して向かい合わせになるように椅子を置き，机の脇には小型の作業棚を置いた。作業棚の上には，赤，黄，青，緑，オレンジ，茶の 6 色にそれぞれ少量の白を交ぜた共用絵具を 1 カップずつ設置した。なお，室内には，こども達の安全確認と，活動開始と終了の合図を示す役割を担うアシスタント 1 名が同伴した。

幼児 2 人に視線分析装置を装着してもらい，防音室に移動した後で，緊張をほぐすために紙コップを積み上げる簡単な造形遊びを行った。その後，何を描くのか，どの描画材を使うのか，活動は座って行うのか立って行うのかは自由であることを伝え，造形活動を開始した。予定では活動時間は 20 分としていたが，別室でモニタリングしていた研究メンバーが，幼児 M が描画を止めた後で活動に戻る様子がないと判断した時点（開始から 12 分後）で打ち切った。終了後，制作意図などについて，幼児 2 人に対して活動場所で若干の聞き取りを行った。

②分析状況

本研究において，視線行動分析では，視線分析装置の記録データをもとにして，相手の手元，制作物，顔，自分の制作物へ眼差しを向ける行為を，いつ，どれくらいの時間を割いて注視を行っているか，時系列で整理した。各対象への視線行動について，全活動時間内の合計値を調べたところ，幼児 M は，相手の手元が 14.61 秒，相手の制作物が 78.76 秒，相手の顔が 10.08 秒，自分の制作物が 186.15 秒であった。一方で幼児 F は，相手の手元が 19.59 秒，相手の制作物が 35.62 秒，相手の顔が 9.64 秒，自分の制作物が 154.91 秒であった。相手の手元（・制作物）を見た後に相手の制作物（・手元）を見たり，自分（・相手）の制作物を見た後に相手（・自分）の制作物を見たりする事象連鎖の回数は，幼児 M に比べて幼児 F が 2 倍近く多いことが分かっ

た。相手の制作物への注視時間は，幼児Ｍの方がほぼ２倍多いことを鑑みると興味深い結果であった。両者の間で相手の制作物への意識の向け方が異なっていることが示唆された。
　制作過程分析では，それぞれの活動過程における発言や行為と画面上に展開される視覚的な情報を同時に時系列に示した。その上で，描画や行為の意味について，画面の視覚情報を契機に描きつないでいく視覚的な文脈と，自己の思いや語りを描いていく物語的な文脈から分析した。幼児Ｆは，画用紙の自分に近い縁を基底線とし，そこから上部に向かい画面全体の約 2/3 までの領域にパスを使用して，終始，椅子に座って描いた。幼児Ｍは終始，椅子に座らず，自由に動きながら，画用紙や画用紙外の台紙の領域まで含めて，絵具とパスで色を塗ったり描いたりする活動を行った。そこでは，絵具に感覚的に関わる活動と，イメージを楽しむ活動が見られた。イメージ活動のきっかけとしては，絵具の塗り込み動作や，塗り込んだ形・色から見立てた場合と，幼児Ｆの描画から触発された場合があった。幼児２人は同じ画用紙，同じ時間を共有していたにもかかわらず，活動過程では全く別々の語りや行為が生起し，それぞれ独自に意味的活動が展開され収束していた。しかし，幼児Ｆと幼児Ｍの活動は相手を意識し，相手の行為や発言，画用紙上の視覚情報から何らかの影響を受けながら継続されていることが分かった。
　相互行為分析では，トランスクリプト作成にあたり，動画記録を階層分節して場面分けし，記述場面を析出した。その上で，視線行動分析によるアイトラッカーの注視時間累積グラフと，栗山の視覚的文脈と物語的文脈による描画プロセス分析シートに基づき，トランスクリプトに時間と文脈の観点を取り入れた。結果，描画行為と相互行為が，幼児２人の協同性の根を相互作用的に触発し，それぞれの文脈において異なる意味を異なる在り方で生成する過程を見ることができた。他者の色やかたちや描き方，大好きなキャラクターや食べ物などが，その他者の文脈を超えてそれを見る自分の文脈における「そうだ」（気づき）を触発し，描く行為や語りの中でその「気づき」を自己の文脈に転用し，色やかたちや声として位置づけてることが分かった。
③まとめ
　分析により，ペアの間で描かれていくものに対して付与される意味や，描画空間上で展開する物語性が読み替えられるタイミングを，視線行動と発話内容の双方から確定化させた。結果，目的やテーマが先行せず，活動を通じて共有化されないなかでも，活動をともにする相手に対して向けられる意識（それは言葉や視線のやり取りとして現れる）が「地」となって，「図」としての造形内容の方向性が肉付けされていく協同性の在り様が明らかとなった。事例では，幼児２人が描き出したものは，画面上では完全に分離した状態となっていた。一瞥すると，活動はパラレルに進展したように見えるが，合目的的に行っているのではない行為レベルまで相互作用の質を捉えていくと，互いの存在が互いの表現を形作っていることが理解された。

＊上記の研究成果の詳細については，武田信吾，松本健義，栗山誠，2021 年 3 月，「こどもの協同的な造形活動における相互作用への質的アプローチ―トライアンギュレーションによる人間研究の深化を求めて―」，『美術教育学』，42，pp. 231-248 で報告している。

（２）児童ペアによる造形活動の事例分析（その１）
①事例概要
　分析対象として扱った事例は，2019 年 10 月に行われた，児童ペア１組の造形活動である。ペアは７歳４ヶ月の女児（以下，児童 G1）と６歳８ヵ月の女児（以下，児童 R1）との組合せであり同じ小学校，クラスに通っている。活動日当日，児童 G1 と児童 R1 にそれぞれ同伴していた保護者によると，２人は学童保育で友人関係にあり，児童 R1 は学童保育では絵を描くことはあるものの自宅では行わないが，児童 G1 は描画が好きであり，自宅でもペンなどを使って絵を描いているということであった。
　活動場所は，鳥取大学地域学部附属子どもの発達・学習研究センターの防音室を使用した。部屋の中央に大きさ 75㎝×120㎝の机を置き，４ッ切サイズ３枚をつないだ白画用紙を設置した。そして，机を介して向かい合わせになるように椅子を置いた。机横には小型の作業棚を置き，共用絵具６色と角型パス１箱を用意した。室内には，こども達の安全確認と，活動開始と終了の合図を示す役割を担うアシスタント１名が同伴した。
　児童 2 人に視線分析装置を装着してもらい，防音室に入室後，緊張をほぐすことを目的として，紙コップを積み上げる簡単な造形遊びを４分程度行った。その後，何をどう描くかは自由であることを伝え，造形活動を開始した。時間は 30 分とし，終了後に制作意図などについて聞き取りを行った。
②分析状況
　視線行動分析では，相手の制作物に視線を向けた時間を 30 秒ごとに合計したものについて，活動全体の総合計時間を 100%とした場合の各時間帯の割合を算出した。結果，児童 G1 は児童 R1 に比べて時間帯によって大きく差がついており，児童 G1 の方が当該注視行動は特定の場面で集中的に示される傾向にあった。一方で，児童 R1 の方は，時間帯によって多少の波はあるものの，児童 G1 に見られるほどの差はついていなかった。しかし，児童 G1 と児童 R1 ともに，活動後半に当該注視行動に特徴的な変化が見られる結果となった。
　活動途中，児童２人はそれぞれの描いているものを比較するような対話をしており，その過程で児童 R1 は自分の絵がうまく描けていないことを話題にしていた。しかし，制作過程分析によると，児童 R1 は児童 G1 に引け目を感じるのではなく，対話や目線の交流によって，思うように

描けない事実を他者と共有し，ある種の肯定感を感じ取り，それが継続の要因となっていた。続く場面では，児童 G1 は目の前の視覚的な情報からイメージが触発され，新たな活動の方向が見出されたが，単に児童 R1 を模倣したのではなく，他者の情報を自分の活動文脈の中に別の形で意味づけ，生かしていることが伺えた。児童 2 人はそれぞれが異なるものを描いているようでも，実は，互いに描いているものや描いたものを共有しながら描き進めていることが理解された。

相互行為分析によると，描画空間の共有の相互的で創発的な状況が，見方，感じ方，描き方，描かれたもの，児童 G1 と児童 R1 の関係を協同性の基盤として多元的に形作っていることが分かった。〈ともにひとつの絵を描くという状況〉を，児童 2 人は自信と楽しみをもって生きはじめているといえる。ペアによる描画活動において，他者が見ている前でもう一人が描き表すパフォーマンスが，「固有世界」と「象徴性」を創造するありようとして示されていた。

③まとめ

本事例におけるペア児童は，ともに描画材の使い方や図像の描き方にこだわりつつ，相互に相手の描く図像に影響を受け合いながら活動を展開していた。先んじて要領よく描画を行う児童 G1 と，困難さに出会いながらも着実に歩みを進める児童 R1 は対照的でもあった。活動前半は児童 R1 が児童 G1 に追随する形が多くみられたが，後半では児童 R1 が自ら描いていく図像を児童 G1 が評価し，引用するようにもなる。そして上記の過程のなかで，2 人は描画材を扱う際に生じるアクシデントも含めて自らの活動状況を発信し合い，それを互いに受け止め合いっていく。こうした両者の相手への関わり方とその推移は，相手の制作物に対する視線行動や発話の内容にも明確に現れていた。活動の後半で，児童 G1 が，自分が描いた図像から自身の描画空間と児童 R1 の描画空間を線でつなぐという行動をとった。このことは，一連の「関係の流れ」のなかで文脈的な必然性があることが分かった。物理的な位置関係として示される描画空間の越境の背景には，両者の間で活動への志向内容が協応していることを象徴的に現れており，そこに協同性の萌芽を見出すことができた。

＊上記の研究成果の詳細については，武田信吾，松本健義，栗山誠，2022 年 3 月，「ペア児童の描画活動における相互作用への質的アプローチ―描画空間の共有状況についての検討―」，『美術教育学研究』，54，pp.161-168 で報告している。

（3）児童ペアによる造形活動の事例分析（その 2）

①事例概要

分析対象として扱った事例は，2022 年 7 月に行われた，児童ペア 1 組の造形活動である。ペアは 7 歳 2 ヶ月の女児（以下，児童 R2 と記す）と 7 歳 8 ヶ月の男児（以下，児童 G2 と記す）の組合せであり，同じ小学校に通っているものの，学年が異なり，互いに面識はない。活動日当日，児童 R2 と児童 G2 にそれぞれ同伴していた保護者に伺ったところによると，児童 R2 は絵や工作が好きで，自宅でもアニメキャラクターや海の生き物をよく描いており，児童 G2 は特に絵を描くことが好きという訳ではないが，アニメキャラクターなどは描くということであった。

活動場所は，関西学院子どもセンターのプレイルーム（床面積 5.6m×5.6m）を使用した。当該施設は，観察室が隣接しており，観察室ではマジックミラー越しにプレイルーム内の様子を見ること，マイクを通じて音を聞くことが可能である。部屋の中央に大きさ 75cm×120cm の机を置き，4 ッ切サイズ 3 枚をつないだ白画用紙を設置した。そして，机を介して向かい合わせになるように椅子を置いた。机の両脇には小型の作業台を置き，片方に共用絵具 7 色，もう片方に丸形クレヨン 16 色セット 1 箱と丸形パス 16 色セット 1 箱を用意した。そして机を囲むように定点カメラ 4 台を設置した。室内には，こども達の安全確認と，活動開始と終了の合図を示す役割を担うアシスタント 1 名が同伴した。

児童 2 人に視線分析装置を装着してもらい，プレイルームに入室後に，緊張緩和を目的として，紙コップを積み上げていく造形遊びを 6 分程行った。その後，2 人で 1 つの画用紙に絵を描くこと，描画材として絵具・パス・クレヨンがあること，描くものは自分たちで好きなように決めていいこと，座る・立つ・場所移動も自由であり，時間は 20 分であることを伝え，描画活動を開始した。活動中，研究メンバーは観察室にて児童 2 人の様子を観察した。活動終了後，研究メンバーの（以下，研究者 K，研究者 M，研究者 T と記す）のうち研究者 K と研究者 M が，17 分程，児童 R2 と児童 G2 に活動の感想などについて話を聞いた。

②分析状況

視線行動分析では，児童 R2 と児童 G2 が研究者 K と研究者 M を交えて対話する場面について，何に対してどれだけ視線を向けていたのか，その注視時間をグラフ化した。結果，児童 R2 と児童 G2 ともに，相手（自分）の制作物が話題となっている時は，相手（自分）の制作物の方を見る傾向があることが読み取れた。特に対話場面の終盤までは，その傾向が顕著であった。ここから，両者とも，（研究者 K と研究者 M も含んで）他者の発言内容に意識を向けている姿勢があることがうかがえた。一方で終盤以降の，位置を移動して制作物を見る場面では，自分の制作物を見ることの方が多い児童 G2 に対し，児童 G2 の制作物を見ることの方が多い児童 R2 という違いがあった。これは，2 人がそれぞれ使用した描画空間の大きさも関係していると推測された。

制作過程分析では，児童 R2 が，描画過程で本来描こうとしたことや，他者や自己の造形性（表層）から影響したこと，描画材からの影響に加えて，事後の対話の中での新たな視点や意味づけを体験し，自分の意味的世界を再構築していったことが伺えた。その変遷過程を体験する場（＝

時間）は当人にとっての「造形の場」であり，それは過程と事後の対話による再認識全てを含む経験の場であると理解された。

相互行為分析では，描画場面で両者の間に生起しなかった互いの差異が，対話により重層化し顕在化していることが分かった。自らの文脈を語ったり，他者の行為の文脈に寄り添って自分の行為の文脈を語ったり，自分の造形行為についての気づきを共に描いた相手や研究者 K や研究者 M に語ることで，児童 G2 は他者の語りと対話し，他者が語る描画の行為と経験の関係に視線を合わせてふりかえり見ることを通して，「確かに」と見え方の変化を経験していた。表現と語りの連続過程で 2 人の児童は差異を重層的に顕在化して経験可能とし，自他間の当事者性の差異に対して実践的関与を可能とし，対話の場に基づいて「造形の場」を協同生成していることが分かった。

③まとめ

本事例における描画過程と活動後の対話場面の分析結果は，次の 4 つにまとめられた。第 1 に，児童 R2 と児童 G2 は研究者 K と研究者 M に働きかけを受けつつ，次第に自発的に自分のコメントを示し合うようになっていることが，対話場面のエピソード記録の流れから読み取ることができた。第 2 に，児童 R2 と児童 G2 は話題となる制作物への眼差しを共有していることが，視線行動分析のグラフに示された。第 3 に，他者との対話を通じて新たに得た視点によって，自分の意味的世界の再構築が促されていることが，児童 R2 への制作過程分析から理解された。第 4 に，描画活動中は生起しなかった差異が対話場面で顕在化し重層化するなかで，児童 R2 と児童 G2 が互いに寄り添い合いながらそれぞれに自分と相手の文脈を語ることで「造形の場」を協同生成する姿が示されていることが，相互行為分析の結果から捉えることができた。上記から，視線，語りが重なることで児童 R2 と児童 G2 の描画への認識が更新され，それがまた視線，語りを牽引する構図を見ることができた。「造形の場」では，例え相手との間で思いに差異があり，制作物の上では異質なものが併存している状況であったとしても，自らが手掛けた制作物というモノが介在した形で行われる対話のなかで，自然と制作物に対する視点が共有され，自発的に思いを語り，受け止め合う関係性が生み出される可能性を持つことが，今回の分析を通じて明らかとなった。またその場では，対話をファシリテートする存在の重要性も示唆された。ここに協同生成される「造形の場」の教育的な意味を見出すことができた。

＊上記の研究成果の詳細については，武田信吾，松本健義，栗山誠，2023 年 3 月，「描画過程と活動後の対話を通した造形の場の協同生成」，『美術教育学研究』，55，pp.169-176 で報告している。

（4）こどもの造形活動の質的研究におけるトライアンギュレーションの可能性

本研究で扱った事例は，その全てが描画材と紙面を共有して使用する描画活動であり，描く内容もこどもたちに任せたものであったが，ペアを組む 2 人のこどもが共に 1 つの絵を描く場面は生じなかった。したがって，当初はこども間に協同性は現れず，活動は平行的に行われているものと見受けられた。しかし，活動のプロセスを微視的に分析すると，互いに相手の描画状況に関心を向け合い，紙面や描画材の用い方や描き方，制作物へ付与される意味は相互に影響を与え合っていることが明らかとなった。そして，その関係性に主従はなく，描画活動への志向内容がこども間で協応し，調整され，共有化されている点において，協同性の萌芽が見出された。

3 つの分析手法によって得られた各データは，研究メンバーがそれぞれの立場から意見を述べ合うなかで，そこに表されているものは何か，互いにどのように関係するのかが明確化されていった。例えば視線行動分析に基づくデータは，個々のこどもの活動内での視線行動に関する特徴を示しつつ，事例中の活動が質的に変化する場面を捉える際のアンカーとしての役割も果たした。即ち，制作過程分析おいては，生成される制作物への意味が共有されるタイミングは注視時間の特徴的な変化として示され，相互行為分析においては，こども間の様々な行為の連鎖は視線の流れとのつながりのなかで説明することを可能にした。結果として，それらはペアを組む 2 人のこどもにとって相手の存在が自らの表現を形作っていることの具体的な根拠となり，造形活動を通じてこどもたちが共に経験したものについて理解を深める糸口となった。

本研究において，トライアンギュレーションを行うにあたっては，研究メンバーの 3 者が分析結果を相互に参照し合うと同時に，互いの研究的な立ち位置や哲学的な背景について，折に触れては理解を深め合う必要性もあった。そのため，長時間に渡る対話の積み重ねが欠かせないものとなったが，異なるアプローチが重なり合うことにより，分析対象を捉える際の解像度が確かに向上する手ごたえも得られた。見え方の変化は見方そのものを問い直す契機をもたらすものとなる。本研究では，造形活動におけるこどもの協同性についての認識そのものが，対話を通じて更新された点において，トライアンギュレーションは極めて重要な意味を持つものとなった。

＊上記の研究成果の詳細については，TAKEDA Shingo，KURIYAMA Makoto，MATSUMOTO Takeyoshi，2023 年 9 月，「Qualitative Approach for Interaction as regards Collaboration and Dialogue in Children's Art Activities」，The International Society for Education Through Art （InSEA）World Congress 2023 in Çanakkale, Turkey（要旨集 p.34 インターネット掲載），および，武田信吾，松本健義，栗山誠，2024 年 3 月，「造形活動の質的分析におけるトライアンギュレーションの可能性について」，第 46 回 美術科教育学会 弘前大会（要旨集 p.59）で発表している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計33件（うち査読付論文　10件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 武田信吾，松本健義，栗山誠	４．巻 55
２．論文標題 描画過程と活動後の対話を通した造形の場の協同生成	５．発行年 2023年
３．雑誌名 大学美術教育学会　『美術教育学研究』	６．最初と最後の頁 169-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金子瞳，大平修也，松本健義	４．巻 55
２．論文標題 描く行為の中の省察と現象学的記述に関する研究 ―造形行為を通した現職派遣教師の学び―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 大学美術教育学会　『美術教育学研究』	６．最初と最後の頁 89-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松本健義，大平修也	４．巻 24
２．論文標題 中学生の描く芸術的行為による存在との対話と他者との共感的関係に関する研究	５．発行年 2023年
３．雑誌名 兵庫教育大学連合学校教育学研究科『教育実践学論集』	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 茂木和佳子，大平修也，松本健義	４．巻 42
２．論文標題 芸術的行為による造形物の超特異化と共感的ネットワークの形成に関する研究―高校生を対象とした金属素材を叩く造形活動の実践と分析	５．発行年 2022年
３．雑誌名 上越教育大学　『上越教育大学研究紀要』	６．最初と最後の頁 83-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山下世史佳，松本健義	4．巻 16
2．論文標題 ある教育者の幼稚園の理念に基づいた音楽表現活動と教育的関わりの事例研究	5．発行年 2023年
3．雑誌名 就実大学教育実践研究センター『就実教育実践研究』	6．最初と最後の頁 65-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金子瞳，松本健義	4．巻 -
2．論文標題 哲学対話報告1　行為としての鑑賞―身体的触発と呼応による探究	5．発行年 2023年
3．雑誌名 八色の森美術展実行委員会『八色の森美術展 2022 記録集』	6．最初と最後の頁 106-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 茂木和佳子，松本健義	4．巻 -
2．論文標題 哲学対話報告2　美術館，作品，他者，私と出合う高校生の哲学対話	5．発行年 2023年
3．雑誌名 八色の森美術展実行委員会『八色の森美術展 2022 記録集』	6．最初と最後の頁 107-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 栗山誠	4．巻 958
2．論文標題 乳幼児は自らを取り巻く世界にある心動かされる環境や事象に出会って「自分」をみつけ、作っている	5．発行年 2022年
3．雑誌名 月刊誌「教育美術」	6．最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 武田信吾，松本健義，栗山誠	4．巻 54
2．論文標題 ペア児童の描画活動における相互作用への質的アプローチ ―描画空間の共有状況についての検討―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 大学美術教育学会 『美術教育学研究』	6．最初と最後の頁 161-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本健義，大平修也	4．巻 23
2．論文標題 芸術的行為により形成されるヘゲモニーと共感的関係に関する研究	5．発行年 2022年
3．雑誌名 兵庫教育大学連合学校教育学研究科 『教育実践学論集』	6．最初と最後の頁 61-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村田透，新関伸也，松本健義	4．巻 54
2．論文標題 「造形遊び」における子どもの問題解決 ―子どもと大人との協働的な関係性に着目して―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 大学美術教育学会 『美術教育学研究』	6．最初と最後の頁 353-360
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大平修也，茂木和佳子，松本健義	4．巻 41
2．論文標題 芸術的行為による身体経験の共有と意味世界の創造に関する研究 ―美術館での鑑賞行為を事例とした分析考察―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 上越教育大学 『上越教育大学研究紀要』	6．最初と最後の頁 133-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 栗山誠	4．巻 No.958
2．論文標題 シリーズ 幼児はすごい『10のこと』連載⑥	5．発行年 2022年
3．雑誌名 月刊「教育美術」	6．最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 武田信吾，松本健義，栗山誠	4．巻 42
2．論文標題 こどもの協同的な造形活動における相互作用への質的アプローチ―トライアンギュレーションによる人間研究の深化を求めて―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 美術教育学（美術科教育学会誌）	6．最初と最後の頁 pp.231-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 武田信吾	4．巻 13（1）
2．論文標題 協同的な造形活動における意図の共有過程についての検討―ペア児童による活動事例に対する視線行動分析に基づいて―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 地域教育学研究（鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース紀要）	6．最初と最後の頁 pp.42-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 武田信吾	4．巻 17（1）
2．論文標題 ペアによる児童の造形活動における相互作用の微視的研究―視線行動分析による他者へ眼差しを向ける行為の検討―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）	6．最初と最後の頁 pp.111-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 栗山誠	4．巻 No.945
2．論文標題 かわいくしたい、カッコよくしたい～憧れや「いい感じ」を表現するこどもたち～	5．発行年 2021年
3．雑誌名 月刊「教育美術」誌	6．最初と最後の頁 pp.6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大平修也，松本健義	4．巻 42
2．論文標題 金属素材を叩く行為による共感的身体経験と造形的自己変革の生成に関する研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 美術教育学（美術科教育学会誌）	6．最初と最後の頁 pp.99-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大平修也，松本健義	4．巻 22
2．論文標題 芸術的行為により節合される他者との共感的な言説に関する研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育実践学論集（兵庫教育大学連合学校教育学研究科編）	6．最初と最後の頁 pp.117-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山下世史佳，虫明眞砂子，松本健義	4．巻 20
2．論文標題 アマチュア声楽家の歌によるライフストーリー：歌うことによる人生のかたちづくり	5．発行年 2021年
3．雑誌名 質的心理学研究（日本質的心理学会誌）	6．最初と最後の頁 pp.168-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大平修也，松本健義	4．巻 40（1）
2．論文標題 幼児の対話と造形行為による生活世界の創造に関する研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 上越教育大学研究紀要	6．最初と最後の頁 pp.125-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 黒岩昭伸，掛健二，松本健義，若林匠美	4．巻 40（1）
2．論文標題 創造活動を媒介とした探究的学習の構造－「理想の水辺」の生成を通した学びの過程－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 上越教育大学研究紀要	6．最初と最後の頁 pp.231-248
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大平修也，松本健義	4．巻 40（2）
2．論文標題 児童の芸術的行為による社会的相互行為の創造に関する研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 上越教育大学研究紀要	6．最初と最後の頁 pp.383 - 397
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 茂木和佳子、松本健義	4．巻 40（2）
2．論文標題 美術館と連携・協働する高等学校の探究プロジェクトの事例研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 上越教育大学研究紀要	6．最初と最後の頁 pp.413-424
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 金子瞳，松本健義	4．巻 40（2）
2．論文標題 成人学習の視点からとらえる教師の学びと省察	5．発行年 2021年
3．雑誌名 上越教育大学研究紀要	6．最初と最後の頁 pp.399-412
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 若林匠美，黒岩昭伸，掛健二，松本健義	4．巻 40（2）
2．論文標題 本質に迫る問いを生成する対話の過程	5．発行年 2021年
3．雑誌名 上越教育大学研究紀要	6．最初と最後の頁 pp.425-237
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松本健義	4．巻 194
2．論文標題 意味や価値を創造し他者とともによりよく生きる－子どもの学びの臨床へ－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 教育創造（高田教育研究会発行）	6．最初と最後の頁 pp.50-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本健義	4．巻 －
2．論文標題 第三章実践編「コラム「For You For Me」について」，「コラム　世界はこわしてつくるでできている」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 上越教育大学附属小学校編著『子どもの「問い」が立ち上がる』	6．最初と最後の頁 p.57,93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 栗山誠	４．巻 922
２．論文標題 夢中のトンネル～活動過程を楽しむ子どもたち～	５．発行年 2019年
３．雑誌名 教育美術 ART in EDUCATION	６．最初と最後の頁 pp.6-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 栗山誠	４．巻 931
２．論文標題 第62回幼児造形Koyasan集会報告	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育美術 ART in EDUCATION	６．最初と最後の頁 p.57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 栗山誠	４．巻 11
２．論文標題 保育の実践力につながる「表現」授業のあり方に関する一考察：造形表現の模擬保育を通した学生の学び	５．発行年 2019年
３．雑誌名 教育学論究：関西学院大学教育学会誌	６．最初と最後の頁 pp.37-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 武田信吾	４．巻 33
２．論文標題 造形活動におけるこどもの注視行動	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ANNUAL REPORT OF THE MURATA SCIENCE FOUNDATION	６．最初と最後の頁 pp.746-747
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 TAKEDA Shingo	４．巻 -
２．論文標題 Gaze Behavior of Children During Art Activity	５．発行年 2020年
３．雑誌名 2019 InSEA World Congress Proceedings	６．最初と最後の頁 全12ページ
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 栗山誠
２．発表標題 「乳幼児期の造形が気づかせてくれる10のこと」について
３．学会等名 美術科教育学会第45回兵庫大会　2022 年度第 2 回乳・幼児造形研究部会
４．発表年 2023年

１．発表者名 武田信吾，栗山誠
２．発表標題 幼児の協同的な描画活動における相互作用への質的アプローチ
３．学会等名 日本保育学会 第73回大会（＊新型コロナの影響で会場には参集せず，発表論文集掲載を以て代替）
４．発表年 2020年

１．発表者名 大平修也，松本健義
２．発表標題 金属素材を叩く行為を通して生成される共感的身体経験と造形的自己変革に関する研究―高校生を対象とした授業の開発実践と分析考察
３．学会等名 大学美術教育学会第73回大会（遠隔開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 武田信吾，松本健義，栗山誠
２．発表標題 児童の協同的な造形活動における相互作用への質的アプローチ
３．学会等名 美術科教育学会千葉大会（新型コロナウイルス感染拡大のため中止，予稿集発刊）
４．発表年 2020年

１．発表者名 武田信吾，栗山誠
２．発表標題 幼児の協同的な描画活動における相互作用への質的アプローチ
３．学会等名 美術科教育学会千葉大会（新型コロナウイルス感染拡大のため中止，要録集発刊）
４．発表年 2020年

１．発表者名 TAKEDA Shingo
２．発表標題 Gaze Behavior of Children during an Art Activity
３．学会等名 MAKING	InSEA World Congress 2019 in Vancouver, Canada（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 笠原広一編著／栗山誠他著	４．発行年 2019年
２．出版社 東京学芸大学出版	５．総ページ数 15
３．書名 アートがひらく保育と子ども理解―多様な子どもの姿と表現の共有を目指して（「子どもの描画過程の研究と子ども理解の可能性」を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松本　健義 (Matsumoto Takeyoshi) (90199878)	上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授 (13103)	
研究分担者	栗山　誠 (Kuriyama Makoto) (10413379)	関西学院大学・教育学部・教授 (34504)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関